

「意識の三者構造」について

山田良憲

はじめに

林信弘の意識研究において特徴的なことは、われわれが一般的に意識と呼ぶものを「無の意識」から、あるいは「非実体性の意識」からみていることである。つまり、「意識」とはこんな性質であるとか、こんな状態であるとか、はたまた意識とは何かということが問題なのではない。あくまで、種々の「意識」なるものが、「無の意識」からどうみえるか、「無の意識」からすると古今東西の意識論の各々がどのように位置づけられるか、ということが問題なのである。

その意味で、林の意識論は直観であり、分析ではない。種々の意識研究の詳細な論述も、「無の意識」の直観から眺めたものであり、すべての意識論は、「無の意識」に落ち着くというのが、林の基本的立場である。林は次のように説いている。少し長いが、大切な箇所なので引用しよう。

「いきなり変なことを言うようだが、単に意識とは何かと問わないことにしよう。たしかにそう問うこともできるが、しかしそれではあまりにも漠然としてとりとめがなく、結局は網羅的だが、単なる教科書的な概説に終わってしまうのが落ちであろう。そこで問いをより明確にするために、非実体性の意識とは何か、そう問うことにしよう。もとよりこの問いへの応答は容易ではない。それはわかっている。わかりすぎるほどわかっている。それでもやはり応答しなければならない。なぜならこの問いに応答することこそが取りも直さず真の意識の解明につながるからである。

しかしそれにしても非実体性の意識とは何か。非実体性の意識とは我々が限りなく深い底なき底に開かれてあるということの意識である。我々の知情意の届かないところ、我々の知情意では如何ともなしがたいところにおいて我々はあるのだということ、いや単に我々のみならず、自然も宇宙も、神も仏も、およそいかなるものにも実体がなく、すべては底無き底としての絶対の無においてあるのだということの意識である。つまり非実体性の意識とは絶対の無の意識の別名なのである。しかもこの無の意識は無が無自身を意識することだから、これを無の自覚と言ってもまったく同じことである。あるいはこの「無の自覚」の自覚それ自体もまた無なので、これを端的に無と言ってもよいし、さらにまたこの無は無で、有無を絶対的に超えた無なので、これを絶対無と呼ぶこともできるのである。」(『意識の人間学』、人文書院、2007年、1頁)

以上の「非実体性の意識」、「無の意識」、「無の自覚」、「無」、「絶対無」は、すべて同一の直観の言い換えである。つまり、非実体性の意識とは、無の意識であり、無の意識とは、無が無自身意識することだから、無の自覚である。そして、無の自覚は、そもそも無なのであり、有無を超越した絶対的な無であるから、絶対無なのである。非実体性の意識＝無の意識＝無の自覚＝無＝絶対無である。林には、無にまつわる決定的な確信、つまり、「無の直観」ともいべき確信があったことは疑いないであろう。それでは、「無」という言葉は何を意味するのか、それを問わずにはおれなく

なってしまう。拙稿は、林信弘の『意識の人間学』の意識論を参考にしながら、林の説く無の意識とは何なののかについて考察してみたい。

第一節 意識の構造

林の意識論における決定的な洞察は、われわれが「意識」としてみなしているものは、相異なる三つの意識から成るということである。

この三つの意識は、自他一元的な自我包摂型の意識、自他二元的な自我強化型の意識、それから両者の意識をともに超越した無の意識という三者構造である。では、「意識の三者構造」とは、いったいどのような意識構造であろうか。林は次のように述べている。

「いまかりに、一般に「意識」と呼ばれているものから人間をみるとき、基本的に人間は質的にまったく異なった三つの意識から成っているように思われる。一つは自他一元の自我包摂型の意識であり、もう一つは自他二元の自我強化型の意識であり、さらにもう一つは絶対無の意識、あるいは端的に無の意識とでも言うべき自我超出型の意識である。もとよりこの三つの意識は複雑に絡みあって混在しており、截然と分けることはできない。無理に分けようとする、全体としての人間を見失ってしまうことになる。」(前掲書、138頁)

林によれば、われわれの意識は、自と他が共に合一することを志向する「自我包摂型の意識」、自と他が共に相反することを志向する「自我強化型の意識」、その両者を生み出すもととなる自我超出型の「無の意識」のいずれかなのである。あらゆる意識を生み出すものが無の意識なのであるから、われわれの意識は、すべて無の意識であるといってもいいのであるが、無の意識はわれわれにあまり自覚されていない。そこで顕在化している意識の根本的な傾向としては、自我包摂型の意識か自我強化型の意識に偏るのである。

たとえば、ある二人の人物が川辺を散歩していたとしよう。そこで可憐に咲く一輪の花をみつける。一人はその美しさに感動し、ただただみとれる。あるいは、その美しい自然の結晶にあふれんばかりの賛辞を贈る。もう一人は、その美しさにひかれるのではなく、形態や色、あるいは、葉草としての効能や機能などに興味をもつ。前者は自我包摂型の意識の強い人で、花そのものに寄り添い、近づこうとする。あるいは、花に成りきろうとする。一方で後者は自我強化型の意識の強い人である。花を外から眺め、観察し、花を対象化しようとする。前者を詩人的、後者を科学的と形容することもできるが、花の見方として、どちらが正しくどちらがまちがっているということはない。だが、往々にして、両者は互いに反目しあう。なぜなら、「私の見方」が正しいと思いたいからである。実際は、誰しも詩人と科学者が併存しているのが、意識の顕在化する方向性によって、見方が偏ってしまうのである。それで、自我包摂型の意識の強い人が、科学的に花を対象化して観察していたら、花の世界に没入してしまい詩人のように花に成りきってしまうこともあるのである。

このように、われわれに顕在化した意識の特徴だけを見ていくと、自他合一傾向と自他分離傾向のどちらかに偏ってしまう。この人間の生来的な偏りに気づき、洞察を深めたのが仏教である。そこで、この偏りから自由になることを仏教では、空や無という。もちろんこの偏りは人間の生来的

なものであり、偏りそのものが無くなるわけではない。そこで、メディテーション（瞑想）を通して、あらゆるものには実体がないという非実体性の意識に目覚め、無の意識に徹することで、この偏りから自由になるように努めるのである。

第二節 自我包摂型人間と自我強化型人間

前節では、意識の構造の概略を示したが、ここからは、個別具体的にそれぞれの意識の特徴を詳しく考察していきたい。まず林の論述に即して、自我包摂型の意識優位の自我包摂型人間と自我強化型の意識優位の自我強化型人間の特徴を述べていきたい。

自我包摂型人間の特徴は、私の私性の消去による他者性の顕在化、関係の優位、実質的対称性の意識の顕在化という三点に集約されるだろう。

自我包摂型人間は、「私が他者になり、他者が私になる自他合一の意識」（前掲書、138頁）が顕在的である。これは、言い換えれば、「私は他者と切れておらず、他者から切れたところで成立する、私は私という、私の私性が否定され、代わって私の他者性が強く顕在化してくる」（前掲書、138頁）ということである。私の私性が消去されることで、他者が私のうちに生きてくる。あるいは、自我強化型人間のように他とは相いれない確固たる「私」が存在せず、つねに私は他者性を内包している。「他者が私のなかに住むことにより、もはや私は私ではなく、私のなかに住む他者こそが私なのである」（前掲書、138頁）ということになる。

自我包摂型人間は、他者あつての私という立場であるので当然、私の私性や他者の他者性の尊重よりも、両者の関係が優位になってしまう。林は次のように述べている。

「私と他者の関係は、私があり他者があるから、私と他者の関係があるのではなく、私と他者の関係があるから、私があり他者がある、そのような関係となる。私があり他者があるから関係があるのではなく、関係があるから私があり他者があるのである。関係が私や他者より優先するのである。まず関係ありきなのである。」（前掲書、139頁）

関係が私という個人より優位にあるということは、「私」が軽んじられる一方で、「私たち」や「我々」という私の所属する集団が尊重されるのである。そこから、お国のためなら、会社のためなら、学校のためなら、町内会のためなら、という形で、個人の自由が抑圧されることもある。あくまで、「我々があるから私があり他者があるのであって、私があり他者があるから我々があるのではない」（前掲書、139頁）のである。

このように自我包摂型人間は関係が優位になるため、結果的に実質的対称性の意識の顕在化が起こる。林は次のように述べている。

「自我包摂型の意識においては、実質的対称性が意識される。そこでは他者のなかに私が住み、私のなかに他者が住むことで、私が他者であり、他者が私となる。これはたしかに深い合一感のなかで、言いようのない安らぎをもたらす。しかもここで言う他者は単に人間に限らず、山川草木虫魚

禽獣、あるいは神や仏といった超越的存在者、あらゆるものがこれに含まれる。」(前掲書、141頁)

自我包摂型人間には、深い自他合一感がある故に、孤独とは無縁の安らぎがある。私と他者の区別が先鋭化されるのではなく、その区別が消去されていく。私と私でないものの境界が曖昧になり、まるで一体化しているように感じるのである。そして、その合一の対象は、他者である場合もあれば、自然である場合もあるし、超越者のような眼にみえない存在であることもある。

しかし、この実質的対称性は危険な面をもっていることを忘れてはならない。なぜなら、自我包摂型人間の意識においては、「自我強化型の意識ではありえないもののあいだに実質的対称性が意識される」(前掲書、141頁)ことがあるからである。「私が他者となり、他者が私となる」という自他合一の意識そのものが危険なのではなく、統合失調症のように、実質的非対称性が破壊され、私と他者、自と他を区別できなくなってしまうことが危険なのである。

一方で自我強化型人間は、自我包摂型人間の特徴を正反対にしたものである。自我強化型人間の特徴は、深い自他分離と私中心主義である。自他合一感が顕著な自我包摂型人間とは違って、自我強化型人間の意識の特徴は、徹底した自他分離的傾向である。林は次のように述べている。

「自我強化型の意識においては、あくまで「他者は他者、私は私」であり、私と他者のあいだには深い自他分離がある。私は私であって、絶対に他者ではないのである。そしてそのことを前提にして、私と他者は関係を結ぶ。」(前掲書、139頁)

自我強化型人間は、そもそも他者との合一感を必要としない。他者とは、私とは相容れないから他者なのであって、自我包摂型人間のように、他者とのあいだに実質的対称性が意識されることもない。それ故、他者との関係より私の在り方が優位になる。どこまでいっても私中心主義である。

「私があり他者があるから、私と他者の関係があるのであって、私と他者の関係があるから、私があり他者があるのではないのである。私と他者が私と他者の関係より優先するのである。まず私と他者ありきである。」(前掲書、139頁)

他者との関係よりも私が優位であるということは、他者の側からみても同様である。自我包摂型人間のように、私が他者の他者となるようなことがないように、他者が私の私となることもない。どこまでいっても自他が相容れないのである。その結果、「自我強化型人間は深い存在論的孤独に閉じ込められている。群れをなしていると否とにかかわりなく、深い存在論的孤独に閉じ込められている」(前掲書、144頁)といわれるように、自我強化型人間は、必然的に痛烈な孤独感に苛まれる。私は他者と共に時間や場所を共有しているとしても、そこには自我包摂型人間が感じるような深い自他合一感がないのである。つまり、自我強化型人間は、どれだけ他者に寄り添い、近づこうとしても、そこには、乗り越えがたい深い深淵がある。私がどれだけ他者と一つになりたいと思っても、あたかも両手で煙をつかもうとする子どものように、他者をとらえたと思った瞬間に、そこに他者はいないのである。自我強化型人間は、他者に到達することを切に願えば願うほど、身を切るような孤独に苦しむのである。そして、「自我強化型人間は孤独に根ざす分離不安に苦しめられる。」(前掲書、144頁)といわれるように、この深い存在論的孤独の帰結は、分離不安である。

林は、この分離不安の延長上に、神経症や心身症があるとみる。自我強化型人間の意識の病理の特徴がよく表れているので、引用したい。

「フロイトの精神分析が対象としたのはこの種の自我強化型人間である。この人間においては、自我包摂型の意識は意識ではなく、無意識として受けとめられる。エス (ES) と呼ばれる得体の知れない無意識として受けとめられる。それゆえこの人間はこう言ってよければ、あたかも「自我」(エゴ) という城に閉じ込もって、無気味な見知らぬ敵と戦っている戦士のようなものである。無意識という敵を抑圧し、その攻撃と侵略に抵抗しなければならない。この抑圧・抵抗と攻撃・侵略の不断の緊張関係が神経症を生む。そこで神経症に打ち勝つためには、攻撃し侵略してくる無意識を発見し、それを自我のなかに取り込み、少しずつ陣地を拡大すること、しかも何度も何度も繰り返しそうすることである。それは言い換えれば、自我包摂型の意識と戦い、それを自我強化型の意識のなかに取り込み続けることを意味している。しかしこの戦いは決して勝てない戦いであり、ただ負けない戦いをするだけである。それは果てしのない戦いである。何と疲れはてることか。」(前掲書、144頁)

最後の「何と疲れはてることか」という一言に、自我強化型人間に対する林の思いが表白されているが、自我強化型人間が、自我包摂型人間のような自他合一の意識を顕在化することは、不可能なのであろうか。これに対して、林は自我強化型から自我包摂型への自我変容の道もあると考える。

第三節 自我変容の道

前節では、自我包摂型人間と自我強化型人間の特徴についてみてきた。そして、どちらにも不可避免的にマイナス面があることを確認した。このことをふまえて、本節では、自我強化型人間から自我包摂型への自我変容の過程について述べていきたい。林は、「自我強化型人間自身が自ら進んで自我包摂型の意識を活性化することによって、自らを自我包摂型人間へと変容させること」(前掲書、145頁)ができるという。そして、そのためには「自我強化型の自他二元の意識を否定して、代わってそれまで強く否定してきた自我包摂型の自他合一の意識を活性化することによって、もう一つの自我の在り方へと変容すること」(前掲書、145頁)が必要であるという。

林は、ブーバーの「我-それ」から「我-汝」への変容、ベルグソンの「第二の自我」から「第一の自我」への変容、あるいは、ウィルバーの意識のスペクトルの段階的変容を自我変容過程の例証としてあげている。このような自我変容過程を経ることで、身を切るような痛烈な孤独感が解消され、自我強化型人間も他者のなかに私が生き、私のなかに他者が生きる自我包摂型人間のようになる。

だが、そこでの自我変容過程が自己を見失うという方向に傾き、自我包摂型人間のようにってしまったら、元の木阿弥である。林は次のように述べている。

「しかし他面、この自我包摂型人間は、もし限りなく深い底無き底としての無の意識に裏づけられ、貫かれていないとき、自動的に他者依存にはまり込んでいく。かけがえのない自我の自我性、つ

まり私の私性が軽視されるからである。ということは、他者の他者性が軽視されるということである。」(前掲書、147頁)

また自我変容によって、自他合一が成し遂げられた場合、それを維持することができればいいが、たいていの場合、何らかの形でうまくいかなくなってしまう。そして、その場合、自我強化型人間の孤独とは、まったく異なった苦しみにさらされる。

「もし何らかの仕方で自他合一がうまく作動しなくなると、激しい憎悪にとらわれ、他者攻撃に転じる。自分でもどうしようもない憎悪に駆られて、他者を傷つけ、苦しめることになる。そしてそのことがはねかえってきて当然、自己自身もまた深く傷つき、苦しむことになる。」(前掲書、147頁)

それ故、何としても自我強化型の意識と自我包摂型の意識のそれぞれのマイナス面を止揚した立場が必要なのである。それでは、そのような立場とは、どのようなものであろうか。次節で検討してみたい。

第四節 自我超出型人間と無の意識

先に自我包摂型の意識も自我強化型の意識も、はたまた自我強化型から自我包摂型になった自我変容型の意識も、結局は何らかのマイナス面をはらんでいた。林は、このマイナス面の克服に自我超出型の意識に徹するということで応答する。つまり、自我強化型人間から自我包摂型人間への対極的な自我変容ではなく、自我包摂型人間も自我強化型人間も自我超出型人間への自我変容によって、両者の弊害を矛盾的に止揚することを試みる。「自我超出型人間こそ自我変容の根本課題である。そこにおいてはじめて、自我強化型人間と自我包摂型人間のマイナス面がともに乗り越えられる可能性ははらまれているからである。」(前掲書、148頁)といわれるように、林の意識論の立場では、人間の意識の本来的傾向である自我包摂型の意識にとどまることも、自我強化型の意識にとどまることもなく、両者を乗り越えることが目指されるのである。

それでは、具体的に自我超出型の意識とは、どのような意識なのであろうか。林は次のように述べている。

「自我超出型の意識においては、この自己否定がどこまでも限りなく遂行される。ここで終わりということがない。そしてそうであるがゆえに、この意識においては、私と他者は無的相互限定においてある。つまり一方では、私のなかに他者が生き、他者のなかに私が生きるとともに、しかも同時に他者はあくまで他者であり、私は私である、そのような無的相互限定においてあるのである。」(前掲書、140頁)

自我超出型の意識においては、自己否定の徹底により、自己が減せられるとともに、そこから真の自己が現れてくる。その自己が他と向かい合うことで、自と他は、無的相互限定において存在する。それを意識という観点から考えると、自我包摂型意識の「私のなかに他者が生き、他者のな

かに私が生きる」という意識と、自我強化型の「他者はあくまで他者であり、私は私である」という相矛盾した意識が共存するのである。

ところで、この自我超出型の意識は、字面だけ追って考えてしまうと、ただのキレイゴトのようにみえてしまう。字面だけでは、自我包摂型の意識のプラス面と自我強化型の意識のプラス面を並列しただけである。そこで、自我超出型の意識がキレイゴトではないことを立証するために、林は自我超出型の意識が、坐るメディテーションとしての坐禅を通した徹底的な自己否定による、個人の自覚の問題であるという切り口から考えている。林は次のように述べている。

「自我超出型の意識の自覚は自我超出型の意識自身によってのみ可能である。自我超出型の意識が自我超出型の意識において自我超出型の意識を自覚するのである。そしてそれが可能となるには、坐る省察、坐る瞑想、坐るメディテーションとしての坐禅の徹底的遂行が必要である。自我包摂型の意識と自我強化型の意識の非実体性を暴き出す意識訓練法としての坐禅の徹底的遂行が必要である。」(前掲書、142頁)

自我包摂型の意識も自我強化型の意識もともに、意識の本質的傾向性であった。それに対して自我超出型の立場は、あくまで意識訓練法を通した意識の覚醒が必要なのである。そこで、林が例示する自我超出型人間は当然の帰結として、良寛や西田幾多郎、松尾芭蕉、種田山頭火のような坐禅という意識訓練法を通した意識の覚醒者ばかりになる。なぜなら、無の意識とは、本質的に言葉で分析的に理解するものではなく、メディテーションを通して直観的に理解するものだからである。そこで、林は、ひたすら同じことを強調するのである。

「自我超出型人間が自我包摂・自我強化均衡型の道を歩むには、何よりもまず無の意識に徹する必要がある。それは無が無自身を意識することだから、無の自覚と言い換えても同じことである。とにかく無の意識に徹することである。底無き底としての絶対の無の意識に徹することである。そこから出直さなければならないのである。」(前掲書、154頁)

以上のように、自我包摂型の意識も自我強化型の意識も意識の本来の自然状態であるのに対して、無の意識は、メディテーションを通した意識訓練法によって直観される意識であった。メディテーションからこの直観に到達し、自己の偏りを自覚することで、真の自己に目覚めるということが、林の「意識の三者構造」の特徴である。あるいは、林の恩師である上田閑照の「私は、私ならずして、私」であるという表現を借りれば、つねに「私ならずして」に開かれることで、私の偏りを自覚することである。そしてさらにそれを踏まえて、林は、「利己的欲望や情念を解消しつつ、可能なかぎり他も生かし我も生かすこと」(前掲書、154頁)が肝要であるという。

参考文献

- 林信弘『超実存的意識』法律文化社、1993年
- 林信弘『意識の弁証法』晃洋書房、1999年
- 林信弘『意識の人間学』人文書院、2007年
- 林信弘『無の人間学』晃洋書房、2013年
- 林信弘『いかに生きるか』晃洋書房、2013年

林信弘『信じ愛すること』晃洋書房、2014年

林信弘『人間、その光と闇』晃洋書房、2016年

(語り部の会 熊野古道中辺路)